IS<インフィニット・ストラトス>　～変わっていく物語～

ひりゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ＞インフィニット・ストラトス＜　～変わっていく物語～

【Ｎコード】
Ｎ６６６５Ｕ

【作者名】
ひりゅう

【あらすじ】
ある日、神様のミスで死んでしまった日比谷裕貴。
神様のお詫びで『第２の人生』を与えられたがその世界は……
女性にしか反応しないパワードスーツ『ＩＳ』があるインフィニット・ストラトスの世界だった！
そして神様の力でＩＳを起動し、ＩＳ学園へ入学。
そこで知り合った仲間とともに苦労の耐えない日々を送る。
※オリ主は転生者ですが、原作のことを全く知らない設定です。
セシリアヒロインです。セシリアのイメージを崩されたくない方

はブラウザバック推奨です。

プロローグ

ここは何処だ？

あたりを見渡すと一面白い世界が広がっていた。

「俺は……？」

なにもわからない。
なにも思い出せない。

「お～い」

なにか聞こえた。空耳だろうか。後ろを振り向くと、七歳くらいの男の子が、仙人の着るような服を纏い、杖を片手に立っていた。

「ごめんごめん、僕の手違いだよ～」

――手違い？　何の話だ？

「あ～、覚えてないんだ。じゃあ教えてあげよう。ストレートの言うと、君は死んだんだよ～」

――死んだ？　なんで俺が？

「えっとお、君が自転車を乗ってるところに車にはねられて死んでしまいました～」

おいおい、なに軽く言ってんだよ。
まあ、俺には悲しんでくれる家族も友達も居なかったけどな。親戚なんて死んだ両親の遺産を食い荒らすだけの腐った連中ばかりだったしな。

「あっ、自己紹介がまだだったねえ。僕は君たちの言う“神”だね」

神様だと！？　ほんとにいたのか！？
まあいいまずは状況を理解しよう。

――ていうか、何で俺が死んだの？

「ごめ～ん、僕のミスなんだ～。ホントはあと６年くらい生きれたんだけどねえ～」

――え？それでも６年？

ちなみに俺は１５歳だ。でも２１歳までしか生きられない運命だったとはとは不憫だね、俺。

「そこで、お詫びとして君に第２の人生をあげよう～」

――えっ？　マジで？

「マジマジ～。でも元いた世界には戻れないからそこは我慢してね～」

――ん？　じゃあどんな世界に転生するんだ？　俺。

「それはね、『ＩＳ』っていうライトノベルの世界だよ～」

――ＩＳ？　なにそれ？　俺ラノベとか読まないし。ちなみに漫画とかも一切買ったことはない。

「ん～、『ＩＳ』はね。日本で開発されたまるちふぉーむすーつで、それに人が乗ってバンバンする兵器だよ。でもね？　この『ＩＳ』っていうのは女の人にしか使えないんだよ～」

――だめじゃねえか。世界の半分はそれ使えねえんだろ？　あれ？　これ死亡フラグ？

「ちなみにここでその世界で生き延びるための能力を君に付けるんだけど～、どんなのがいいかな？」

――そうだな……じゃあそのＩＳとやらに乗れるようにしてくれ。それだけでいい。

「いいけど、欲がないね～君。他の人だと『顔をイケメンに！』とか『無限の剣製の能力を俺に！』とか『とにかくチートに！』とか色々なことを言われんるんだけどね～」

――俺は何事も努力していくのが好きなんだ。最初からそんなんだったら何も面白くないだろ？

「君面白いね。じゃあ～、そろそろ送り出すけどいいかな～」

――え！？　速っ！？　まだ俺にも心の準備が……

「じゃあね～」

すると突然目の前が暗くなり体の感覚も失われた。
とまあ、そんなこんなで俺の『第２の人生』が始まるわけだが、
いったいどんな世界なのか……楽しみだ。

プロローグ（後書き）

8／9修正

男のＩＳ操縦者

さて神様にＩＳという世界に転生させてもらった俺《日比谷裕貴》はもう中学生。

つい１ヶ月前の入学式を終えて平和な暮らしを堪能していた。

え？　展開が速い？　うるさい！　俺のつまらん日常生活を語っても面白くないだろ。

まあ日本に大量のミサイルが飛んできたときはマジで焦ったが。

ん？　じゃあなんで生きてるんだって？　そりゃあ、あのＩＳが何とかしてくれましたよ。たった一機で。

「だあああ。暑い！　なんで5月なのにこんな暑いんだ！？」

俺は学校を終え一人自宅にいた。今は五月下旬、にもかかわらず気温が三十度に届く勢いだった。

「お茶～」

コップによく冷えた麦茶を注ぐ。それを一気にのどへ流し込む。

この爽快感がたまらない。

そこへ一本の電話が鳴り響く。

――プルルルルルッ

「もしもし？」

「裕貴か？」

「ああ父さん。どうしたんだ？」

「ああ。お前にこの前ＩＳを見たいと言っていただろう？　だから触らせてやろうと思ってな」

「マジで！？　よっしゃあああ！！」

「で、今度の日曜日に迎えを送るから、父さんの研究所まで来てくれ。じゃあ」

「ああ！　ありがとう！　父さん！」

――ガチャッ

俺の両親は科学者だ。

俺が生まれる前、父さんと母さんが付き合った居た頃、二人でＴ（ト）ＦＩＣ（フィック）というＩＳ専門企業を立ち上げたらしい。そして今は世界のＩＳシェア第四位まで登り詰めている。さらにもう第三世代型ＩＳの開発まで成功しているらしい。

ちなみにＩＳ専門企業なのであの篠ノ之博士ともちょっとばかりは面識がある。

両親は話しかけても恐ろしい毒舌で一蹴されていたけどな、でも俺は気に入られたのかよく絡まれていた。

……いやな思い出しかない

そして日曜日。

「なんか久しぶりに来たな。何年ぶりだ？」

ここはＩＳの研究所だ。我がＴＦＩＣ社は、この女性優遇、女尊男卑の社会でもそんなの関係ねえ！　とばかりに父さんが社長、母さんが副社長だ。

「よくきたな裕貴。さあこっちだ。」

俺は父さんに連れられ研究所の奥へと入っていく。

中にはやはりＩＳの部品のようなものがズラリと並んでいた。

は～、どれも高そうなのばっかりだ。これでやっていけんのかね？

そして俺の目の前には一機のＩＳ。純日本産ＩＳ『打鉄（うちがね）』、これは倉持技研との共同開発で製作された第二世代型ＩＳ、量産型だ。

「すげ～、これがＩＳかぁ」

「どうだ？　ちょっと触ってみてもいいぞ」

俺はそのＩＳにそっと手を置いてみる。すると――

「な、なんだ？」

俺の頭にまるで電撃が走ったように、ありとあらゆる情報が流れ込んできた。

「裕貴！？　どうした！？」

「ＩＳが反応してる？　そんな、男に動かせるはずがないのよ？」

父さんと母さんが驚きの声を上げる。そりゃそうだ。

で、結論を言うとＩＳ動かせました。まあ神様に頼んだし、当然といえば当然なんだけど。

それからこのことは極秘情報として他人に口外することは許されなかった。もし迂闊に世界に広まれば研究だの調査だのと面倒なことになるからな。

そしてすぐに俺のＩＳ適正検査が開始される。

結果は、適正Ａ＋２

正直俺にこんな適正があったのかと不思議に思う。

神様、これはそれなりではなくてやりすぎですよ。

そして俺には専用機が作られることになり、同時にＩＳ操縦の訓練が始まった。

――そして一ヶ月。

俺に専用機が届けられた。

「……これが俺の」

『黒鉄（くろがね）』これが俺のＩＳだ。
黒を基調に所々赤のラインが入っている。
打鉄の派生機で性能が全く違うものとなっている。打鉄は防御型のＩＳで性能が安定しており、扱いやすい。一方この黒鉄は超攻撃型ＩＳだ。背中にはガトリング砲が二門搭載されており、多弾頭ミサイルポッドも四機搭載している。

「これが裕貴の第三世代型専用ＩＳだ。まあ扱いにくいかもしれんが、頑張って慣れてくれ」

「ああ、なんとか頑張ってみる」

第三世代型ＩＳは燃費が悪い。燃費の向上に重点を置いているＩＳもあるらしいが、とにかく燃費が第三世代型ＩＳの課題と言える。そこで開発されたのが俺のＩＳ『黒鉄』だ。父さんが言うには、「エネルギーが切れる前に殺っちまえばいい」ということで超攻撃型になったんだとか。

「裕貴、ＩＳ学園にいってみるか？　ＩＳのデータも取りたいしな。あと３年か」

「当然そうなるよな……わかった、俺行くよ」

――ＩＳ学園
ここはＩＳの操縦者育成を目的とした教育機関だ。なんでもこのＩＳ学園、あらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないらしい。だから新技術の試験とか、他国のＩＳとの比較が出来て便利だそうだ。

そしてこれから俺のＩＳと共に訓練をしながらＩＳ学園を目指す日々が始まった。

男のＩＳ操縦者（後書き）

感想よろしくお願いします。

８／９修正

ＩＳ学園へ

俺の専用機『黒鉄』を手に入れて３年後、俺は当然のごとくＩＳ学園へ入学することになった。
だが、世間は俺のことをまったく知らない。
おそらく今年入学する生徒も知らないだろう。
なにせ俺がＩＳを使えるって言うのはいろいろと事情があって、公開していなかったからな。
男がＩＳを使えるのは世界で織斑一夏だけってわけだ。
まあサプライズで驚かしてやるって言うのも面白そうだ。

――そして入学式

俺は自宅でさわやかな朝を迎えた今何時だ？
“６時３０分”
ぜんぜん余裕だ。ここからＩＳ学園へは３０分かからないからな
――二度寝

「ん？」

俺は眠い目をこすって時計に目をやる――は？
“８時ジャスト”
ぬうわああああああ！！！
入学式そろそろ終わるころじゃねえか！！！

「やべえええええ！！！」

俺は制服を1分とかからず身に纏う。

火事場の何とかってやつだな――って、こんなこと考えてる場合じゃない！

急いで朝食も食べずに外へ出て走る、

走る！

走る！！

走る！！！

「以上です！」

――ガラッ

「すみません遅れました！！」

みてみると数名の女子がこけている。なぜ？

「あの～」

「はっ、はい！」

教壇に立っているおそらく先生である人が答える。

「どっ、どなたですか？」

「ええっ！？　俺はここの入学生です！わかりませんか――？」
「いや――あなたは男性ですし……」
「それだったら織斑だって男でしょう！？」
「あっ、そうか」
パアンッ！
「うげっ！」
「貴様はなにをやっとるか！　まずはじめに職員室へ来るようにといっただろうが！」
俺の頭を出席簿でひっぱたいた女性は、このクラス――一年一組の担任である織斑千冬もとい織斑先生だ。
「あっ、忘れてました」
そういやあそんなこといってたな――いてえっ！　また叩かれた
「おまけに遅刻までしおって……まあいい、早く席に着け」
「は、はい」
まわりをみてみると女子だけでなく一夏まで唖然としている。
二人目の男だぞ？　なにかしらリアクションしてくれよ。でないと俺もきつい。

「ふ・・・ふ・・・」

ふ？

「二人目の男子だーーーー！！！！」

そういってクラスは騒然とする――ぐわあ！　鼓膜が裂ける！

「なんで！？　なんで！？」

「しかも、超カッコイイーーー！！！」

そうなのか？　俺がかっこいいか？　そうかそうか……ムフッ

「で、でも！　あたしは織斑君のほうがいいな！」

「えー！　うそー！　二人目の男子でしょ！」

「ええい！　静まれ！　話が進まん！」

織斑千冬――もとい織斑先生の言葉で一瞬でクラスが静かになる。すげえなこの人。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物に操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく利き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

こ、この人……一言に迫力が……

「キャーーーーーーーー！　千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に入学したんです！　北九州から！」

別にどこでもいいけどな、北九州だろうが、アメリカだろうが、北極だろうが。

北極はおかしいか。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

そりゃご苦労なこった。俺はあったこともない人のために死ぬなんてごめんだけどな。

「で？　挨拶も満足に出来んのか、お前は」

突然、織斑先生がもう一人の男子――織斑一夏にキラーなパス。

鬼。

「いや、千冬姉、俺は――」

パアンッ！

おおっ、痛そうだ。てゆうか、痛いよ？

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「え……？織斑君って、あの千冬様の弟……？」

うん。ちなみに俺は知ってた。なぜかというと、試験のときに織斑先生に直接聞きました。だって織斑って苗字珍しいじゃん。

「それじゃあ、世界で唯一男で『ＩＳ』を使えるのっていうのも、それが関係して……」

おい、俺も使えるぞ！　こいつら俺がいるのを忘れてやがるな。

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなぁっ」

え？　本気か？　俺はお断りだ、こんな姉が居たら脳が潰れちま――パアンッ！　な、なんで？

「お前、何か失礼なことを考えていただろう？」

「えっ？　あ、あははっ」

読心術ですか？　織斑先生、油断も隙もないな。

「ああっ、もう一人の男子っ！　忘れてた！」

忘れるな！　そんなんじゃ友達できんぞっ！

「な、なら自己紹介をしてもらいましょう。どうぞ」

久しぶりにもう一人の先生が口を開いた、背が低い割りに胸が……い、いかん！　俺は何を考えているんだ。

「わかりました」

そういって俺は立ち上がる

「俺は、日比谷裕貴（ひびやひろき）。趣味などは特にない。俺がここにいるのは場違いな気がするが、よろしく頼む」

こんな感じか？　うっ、女子の目線が痛い！

「はいっ、先生」

「なんですか？　どうぞ」

「座席表に日比谷君の名前がなかったんですけどどうしてですか？」

「えっと、それはですね……」

きょにゅ――もう一人の先生が口ごもってしまった。そして慌てるたびにその豊満な膨らみが……っていかんいかん！

「俺がＩＳを操縦できると世界に知れたら、当然俺の体を調べたいというやつが出てきたり、他の国に狙われるかもしれないからな。いろいろ面倒だから、公表してなかったんだ。これが理由だ」

質問した生徒は納得したように頷く。

そしてここでやっとチャイムが鳴った。

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

まさに鬼教官だな――おっと、こんなことを考えてたらまた叩かれる。

ギロッ！

ひぃぃっ！

◇

「ふう～～～～」

やっと一限目のＩＳ基礎理論授業が終わり今は休み時間。

俺は案の定机に突っ伏している織斑一夏に話しかけに行く。

「よおっ！」

すると突然、頭を起こし俺の手を握ってこう言った

「ありがとう！助かったぜ！」

眼が輝いてるよ、相当キテたんだな。ちなみに、俺と織斑以外全

員女子って言うのはかなりきつい。いやまじで。うらやましいとかいう奴がいたらガトリングで蜂の巣だ。

「お、おう。俺は日比谷裕貴。裕貴って呼んでいいぜ」

「ああ、よろしくな裕貴。俺のことも一夏って呼んでくれ！」

「おう、よろしく！一夏！」

俺たちはガッチリと友情の握手をする。そしてこの友情は決して壊ることはないだろう。

「……ちょっといいか」

「え？」

話しかけてきたのは、長い黒髪をポニーテールにしてまとめている女子だった。

「……箒？」

「……」

箒という女子はなにやら一夏と知り合いなようだ。

「そうだ、箒、紹介するよ。こいつは、日比谷裕貴。裕貴がいなかったら俺はどうなっていたか」

「……篠ノ之箒だ」

「ああ、よろしく篠ノ之さん」
「こちらこそ……それより一夏」
「なんだ？」
「廊下でいいか？」
「お、おう」
一夏は篠ノ之に連れられて廊下へ出て行った。すると、そこに固まっていた女子がざあっと道を空ける。
うおうっ！　モーゼの海わたりだ！
そして、一人残された俺はというと
「……」
「……」
ずっと見られてました。いや自意識過剰とかじゃなくて、本気で。

◇

「――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ――」

教科書を読んでいるのは山田先生だ（さっきの授業で教えてもらった）。
こういうところを見ているとやっぱり教師だなって思う。失礼か？

さて、俺は前からＩＳに乗ってるから授業は問題ない。
だが、問題は――一夏だ
ほかの生徒がノートを取っている中、一夏だけは顔面を蒼白にして辺りをきょろきょろ見渡している。大丈夫か？

「織斑君、なにかわからないところがありますか？」

山田先生のフォローが入る。でもですね、あの状況相当やばいですよ。

「あ、えっと……」

「わからないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

「先生！」

一夏が元気良く手を上げる。分からないところを質問して聞くつもりだな。

「はい、織斑君！」

山田先生も自信満々に、ドンと来なさい的な感じで答える。

「ほとんど全部わかりません」

おおい！　そりゃいくらなんでも……ねえ？

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

なにやら

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

いや、必読と書いてあっても普通は捨てないよな？　俺は面倒くさいから捨てない。

間違ってないよな？　うん俺は間違ってない。

◇

「ちょっと、よろしくて？」

「「へ？」」

二時間目の休み時間、俺と一夏が話しているところに女子が声を掛けに来た。

話しかけてきた相手は――煌びやかな金髪に、透き通ったブルーの瞳。僅かにロールがかった髪がいかにも金持ちの家で育ちました

的なオーラを醸し出している。
　この手の女子は、女＝偉いという構図の上で成り立っていることが多い。このご時勢、特にＩＳが注目されてからは男女平等なんて言葉はすっかり消え去り、今やＩＳに乗れる女＞女＞＞＞＞男という馬鹿げた方程式が成り立とうとしている。まあホントにＩＳが乗れてしかも強い人ほどそんな考えは持ってないし、男を尊重したりしていて、弱い女ほど男を見下し馬鹿にするやつが多い。あ、でもそんな人はほんの一握りだから。

「訊いてます？　お返事は？」

「ああ、悪い。オルコットさん、だったか？」

　面倒なことは早急に対処、これ大事。

「ええ、そうですわ。よく憶えていましたわね。」

「まあ、自己紹介したし。憶えてるだろ。イギリスの代表候補生だったな、すげえな」

「ふん、オルコット家の人間ならば当然ですわ」

　ふう、なんとか面倒なことにならずに済みそうだ。

「なあ、裕貴。代表候補生ってなんだ？」

　こいつとんでもねえ爆弾放り込んでくれやがった！

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

「おう、知らん」

さらっと言いやがったー、それくらい分かれよー

「……」

「一夏、代表候補生ってのは、国家代表ＩＳ操縦者の、その候補生として選出される、いわばエリートだな。」

俺は『エリート』の部分を特に強調して言った

「そうですわ！　わたくしはエリート中のエリートなのです！」

お、復活したぞ。さすがは代表候補生、精神も強くていらっしゃる。

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリートですから」

「あれ？　俺も倒したぞ教官」

「は……？」

大丈夫じゃなかったー。もうどうにでもなれ！

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」
「女子ではってオチじゃないのか？」
ピシッ。おわっ、いやな音だ。さてどうしたものか……
「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」
「いや、知らないけど」
「そ、そちらの方はどうなんですの！？」
「ああ、俺も倒したぞ」
「あなたまでも！？　なぜあなたたちのような――」
「えーと、落ち着けよ。な？」
「これが落ち着いていられ――」
キーンコーンカーンコーン。
助かったー、もうすごく疲れた。
「っ……！　またあとで来ますわ！　逃げないことね！　よろしくって！？」
いや、逃げんだろ。俺は心の中でひっそりとそうつぶやいた。

ＩＳ学園へ（後書き）

８／１０修正

クラス代表者

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

今回は織斑先生が教壇に立っている。それほど重要なことなのだろう。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

代表者ですか、めんどくせー。俺、代表とかそういうの嫌いなんだよね。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

教室がざわめき立つ。

クラス長、さらに嫌だー。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

「お、俺！？」

そうだーそうだー。一夏がやれー、一夏が、

「私は、日比谷くんを推薦します！」

一夏がー、って俺も！？

「では、候補者は織斑一夏、日比谷裕貴……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

こ、これはなんとしてでも止めねば！　面倒なことに……

「ちょ、ちょっと待ってくれ！　俺は辞退させ――」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「いや、しかし――」

冗談じゃない！　クラス長になんてなったら、俺の平穏な日々がぶち壊しだ！

「待ってください！　納得がいきませんわ！」

バンッと机を叩いて立ち上がったのは、オルコットだった。おお！　そのまま代表にでもなってくれ。

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

あ……れ？

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！　わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

言いたい放題だな、しかもイギリスも島国だろ。

「いいですか！？　クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

ほう……実力トップね。トップ……ね？

「弱い犬ほどよく吼えるってね」

「っ！？　あなた！　今なんと！？」

「なにって、弱い犬ほどよく吼えるって言ったんだよ。聞こえなかったか？」

「あなた！！　わたくしに喧嘩を売っていますの！？」

「そうだな、喧嘩にならない喧嘩なら売ってるぞ。もちろんまずい料理しかない国の奴になんて負けないって言う意味でな」

「あっ、あっ、あなたねえ！　わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「ん？　最初に侮辱したのはそっちじゃねえか。そんなことも忘れたのか？」

「っ！？　決闘ですわ！」

「ああいいぜ。まあ勝つのは俺だけどな。ああそれとハンデはどうする？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いやいや、どう考えてもハンデ付けるのは俺だろ」

と俺が言った途端クラスから、ドッと爆笑が起こった。

「ひ、日比谷くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「日比谷くんは、それは確かにＩＳを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

プチッ。さすがの俺でもこれにはムカついた。とっさに織斑先生にアイコンタクト、腕のバングルを指差す。

コクッ。

了解は得た。俺は腕のバングルに意識を集中させる。そうこのバングルこそ俺のＩＳ『黒鉄』の待機形態だ。そして次の瞬間、俺の体が一瞬だけ光に包まれ、黒鉄を背中のガトリング砲とミサイルポッドだけ部分展開する。展開時間０．３秒。まあ、こんなもんか。

「っ！！」

「ん？　何か言った？」

黒鉄のガトリング砲をオルコットへ向け、ミサイルポッドはいつでも多弾頭ミサイルを発射できることをクラスに伝える。

クラスのみんなは顔面蒼白といった感じで唖然としている。このとき、口を開いたのはオルコットだけだった。

「あ、あなたも専用機を持っているんでしたの……」

「ああ、中一のときからな。なにせ俺はＴＦＩＣ（トフィック）社、社長の息子だからな」

「ＴＦＩＣ社！？　あのどの企業、国家よりもいち早く第三世代型ＩＳを開発した……」

「そうだ、ちなみにこれは第三世代型ＩＳ『黒鉄』。そして俺は宣言しよう。この決闘、俺は最初にいた位置から一切動かない！」

「！　本気で言ってらっしゃるの！？」

「ああ、本気だ」

これは本当に本気だ。こちとら伊達に超攻撃型ＩＳを使ってねえんだよ。これぐらいは余裕……だと思う。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。日比谷とオルコット、織斑はそれぞれ用意をしておくように。日比谷は早くＩＳを解除しろ。それでは授業を始める」

「……織斑先生」

「なんだ？　織斑」

「さっき、俺の名前も入ってた気がするんですが……」

「そうだ、お前も準備を怠らんようにな」

「そ、そんなぁ」

ドンマイ、一夏。

クラス代表者（後書き）

ＴＦＩＣ（トフィック）社の由来は、「未来は創られる」っていう文を英語に直すと、「Ｔｈｅ ｆｕｔｕｒｅ ｉｓ ｃｒｅａｔｅｄ」になるのでその単語の頭文字から取りました。

感想お待ちしてます。

８／１０修正

入学二日目

放課後、一夏は机の上でぐったりとうなだれていた。

「い、意味がわからん。……何でこんなにややこしいんだ……？」

はあ、やっぱり一夏は助けが必要なようだ。仕方がない。

「一夏、なんなら俺が教えてやろうか？　これでも三年間ＩＳ乗ってるから大丈夫だぜ？」

「本当か！？　助かる！」

「任せとけ！」

まあ、俺の出来る限りはな。俺、教えるの苦手だし。

「ああ、織斑くん、日比谷くん。まだ教室にいたんですね。よかったです。」

「「はい？」」

呼ばれて顔を上げると、織斑先生と山田先生が書類を片手に持って立っていた。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーを渡す。

「あれ？　裕貴のはないんですか？」

「ああ、日比谷くんはしばらくの間は自宅通学にします。部屋が空いてないんですよね」

「大丈夫かよ、裕貴？」

「俺は大丈夫だ。一人は慣れてるし、ここからも近いしな」

「そうか」

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間は違いますけど……えっと、その、織斑くんと日比谷くんは今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

まったく、それくらいわかるだろ。女子と入りたいのかお前は。

「馬鹿かお前。女子と一緒に入るつもりか？」

「あー……」

大丈夫か？　こいつ。

「えっと、それじゃあ私は会議があるので、これで。織斑くん、日比谷くん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

わかってますよ。なんにせよ、今日は疲れたし早めに寝るとする。夕食食ってから帰るか

食堂はどこだったっけな？
そう、ぶらぶら歩いていると――

ズドン！

うおっ！　なんだこの音は！？
まさか！　襲撃！？　勝手に妄想している俺の前に蒼白とした表情の一夏がいた。

「って、本気で殺す気か！　今のかわさなかったら死んでるぞ！」

なんだ？　扉に向かって叫んでやがる。傍からみたらイタイ人だぞ、気をつけろ。
部屋の扉を見てみると、所々に穴が開いていた。しかも木刀が貫通している。何だこの状況。

「よお、一夏。なにやってんだ？」

「裕貴！　助けてくれ！　このままだとまずいことに……！」

「まずいことだぁ？」

「……なになに？」

「あっ、織斑くんと日比谷くんだ」

「えー、あそこって織斑くんと日比谷くんの部屋なんだ！　いい情報ゲット～」

「あー、違う違う。ここは一夏の部屋で、俺の部屋じゃない。俺は当分は自宅通学だ」

「へ～、そうなんだ」

――ってゆうか、やばい！　騒ぎを聞きつけた女子が集まってきた！　これはまずい！　しかも、みんなラフなルームウェアで、下着を着けていない子もいる。

「……箒、箒さん、部屋に入れてください。すぐに。まずいことになるので。というか謝るので。頼みます。頼む。この通り」

一夏が頭の上で合掌。篠ノ之、早く入れてあげてくれ。

「……入れ」

「お、おう」

一夏は、剣道着を着た篠ノ之のいる部屋へ入る。なるほどここは篠ノ之と一夏の相部屋か。

じゃあ、お邪魔しま――

バタンッ！

「へぶあっ！！」

俺が入ろうとした瞬間、勢いよくドアが閉められた。そして、俺はそのドアで顔面を強打！　漫画でよくあるアレだ。

「つぅぅぅぅ……」

これで鼻血が出ないとは、俺の体すげえな。

「ねえねえ、日比谷くんってさ専用機持ってるんだよね？　なんでも授業中にムカついた奴を黙らせたとか」

もうそこまで広まってんのか！？　女子の情報伝達能力、恐るべし。ていうか別にＩＳで脅したりしてないからな……してないよ。

「ああ、持ってるよ。ＴＦＩＣ（トフィック）社製第三世代型ＩＳ『黒鉄（くろがね）』。今度、クラス代表決定戦があるから、その時にでも見れるよ。じゃあ俺はこれで」

俺は背中に突き刺さる女子の視線に耐えながら、その場を後にした。

あ、食堂閉まってる……

◇

入学式翌日。俺は今日こそは遅刻しまいと早めに学園へ来た。朝食はとってないからそのまま食堂へと向かう。

「なあ……」

「……」

「なあって、いつまで怒ってるんだよ」

「……怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

一夏と篠ノ之だ。一緒に朝食食ってんだからもっと会話しようぜ。

「よう、一夏に篠ノ之」

「ああ、裕貴。おはよう」

「……」

俺は一夏の隣に座る。テーブルは六人掛け。あと三人座れる。にしても、話が続かん！　なんとか一夏と篠ノ之の共通の話題を振らねば。

「なあ、そういえばさ、一夏と篠ノ之はどういう関係なんだ？　付き合ってんの？」

「い、いや、そういうわけでは……」

俺の言葉に、篠ノ之は顔を赤くして否定する。あれ？　違うのか？

「そうだぞ、ただの幼馴染だよ。幼馴染。」

「……」

「ん？　どうした箒」

「ふんっ！」

ああ、箒がますます怒った。まずいねこりゃ。

「あ、ああ幼馴染か。そうか」

二人とも仲良さそうにしてたから、俺はてっきり付き合ってるのかと。

「あ、あの、隣いいかなっ？」

「へ？」

見ると、朝食のトレーを持った女子が三人立っていた。しかも一番後ろの女子は袖丈が異常に長い制服を着ている。それ、邪魔にならないのか？

「ああ、別にいいけど」

一夏がそういうと三人組はうれしそうにガッツポーズをしている。そして、周囲はざわめき立っていた。

「ああ～っ、私も早く声かけておけばよかった……」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよ！」

「なんですって！？」

一夏の部屋に来たんだろうな。何回も言うが俺は自宅通学だからそんなのはない。あったら怖い。

「うわ、二人とも朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ」

「俺は夜少なめに取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

一夏が発言。ちなみに俺もそのタイプだ。まあ夜は色々あってすぐ寝ちゃうからなんだけど。

「ていうか、女子って朝それだけでもつのか？　途中で腹減ったりしないのか？」

素朴な疑問。女子の胃袋はそんなに小さいのだろうか。

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。平気かなっ？」

な　んという燃費のよさ。昨今の省エネブームの影響か？

「お菓子よく食べるしー」

「……織斑、日比谷、私は先に行くぞ」

「ん？　ああ。また後でな」

「じゃあ、俺もそろそろ行くかな」

「えっ！？　もう行くのか？」

「ああ、お前も早く食わないと遅刻するぞ」

と、ここで――

「いつまで食べている！　食事は迅速に効率よく取れ！　遅刻したらグラウンド十週させるぞ！」

相変わらずの鬼教官振り――おっと、俺も急ぐか

◇

二時間目が終わり、その休み時間に俺と一夏は女子の壮絶な質問攻めに会っていた。

昨日の偵察モードから突撃モードへ切り替わり、織斑先生や山田

先生がいなくなったのを確認すると一斉に俺たちのところへ詰め掛ける。

「ねえねえ、織斑くんと日比谷くんさあ！」

「はいはーい、質問しつもーん！」

「今日のお昼ヒマ？　放課後ヒマ？　夜ヒマ？」

「いや、一度に訊かれても――」

そう一夏が言おうとして、止まったのを見て後ろを振り向く。すると、なにやら整理券を配っている女子を発見！しかも有料。その儲け俺たちによこせ、バカヤロー。

「日比谷くんって、どんな女の子が好きー！？」

は？　俺は答えねばならんのか？　おい、そこ、急に態度を変えるんじゃない。

「そうだな――」

「休み時間は終わりだ。散れ」

ナイスタイミング！　織斑先生！　すげえ尊敬します！

「ところで織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「？？？」

え？　専用機？　それって――

「せ、専用機！？　一年のしかもこの時期に！？」

「わあ～、男子は二人とも専用機持ちかあ～。いいなぁ……私も早く専用機ほしいなぁ」

「本来なら、ＩＳ専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「は、はい――」

まあ、当然といえば当然か。男なのにＩＳを動かせる一夏には専用機を与えるよな、データ収集を目的に。

ちなみに篠ノ之ってあの篠ノ之博士の妹ならしい。さっき言ってた。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

休み時間、やっぱりセシリアは俺と一夏のところにやってきて、

腰に手を当ててそう言った。ふむ、いつも腰に手を当てているが、腰が痛いのか？　そんなわけないか。

「まあ？　一応勝負は見えていますけど？　さすがにフェアではありませんものね」

「俺は負ける気なんてサラサラねえぜ？」

「そう言っていられるのも今の内ですわ。残り一週間、謝る練習をしておいたほうがよくなくって？」

こいつ俺がいるの忘れてないか？　俺って影が薄いのか？　ガックリ……

「なあ、俺がいること忘れてないよな？」

「あら？　あなたも専用機持ってるんでしたわね。まあでも？　クラス代表になるのはこのわたくしであるのをお忘れなく」

そう言ってセシリアは立ち去っていった。

「そうだ、箒」

「……」

「篠ノ之さん、飯食いに行こうぜ」

一夏が篠ノ之を昼食に誘っている。篠ノ之はさっきのことで妙に浮いてるからな。一夏の気遣いだろう。

「他に誰か一緒に行かない？」

「じゃあ、俺も行くぜ」

俺も当然行く。一夏の幼馴染の篠ノ之とは仲良くやりたいしな。

「はいはいはいっ！」

「行くよー。ちょっと待ってー」

「お弁当作ってきてるけど行きます！」

やっぱりな、二人だけしかいない男子を見逃すわけには行かないって感じだ。

「……私は、いい」

「まあそう言うな。ほら、立て立て。行くぞ」

「お、おいっ。私は行かないと――う、腕を掴むなっ！」

一夏が強引に箒の腕を引っ張る。刹那、一夏は床の上に投げ飛ばされた。

あ、さっきの女子が逃げて行っちゃったよ。そして、またも強引に箒を学食まで連れて行くのだった。

学食到着。俺たち三人は日替わりの鯖の塩焼き定食を買ってあいているところに座る。

「そうだ、一夏。お前、ＩＳのことぜんぜん分かんないだろ？　放課後俺が教えてやろうか？」

「ホントか！？　じゃあ、頼むわ」

「篠ノ之も一緒にどうだ？」

「私は――」

「ねえ。君たちって噂のコでしょ？」

いきなり声をかけられた。見ると、リボンの色が赤いし、三年生のようだ。

「はあ、たぶん」

一夏が返事をすると、先輩は隣の席に腰かけた。うーむ、やはり三年生は雰囲気が違う。大人びているな。

「代表候補生のコと勝負するんでしょ？　なんなら、私が教えてあげよっか？　ＩＳについて」

「結構です。私が教えることになってますので」

あれ？　いつのまにか箒が教えることになってるぞ。別にいいけど。

「あなたも一年でしょ？　私のほうがうまく教えられると思うなぁ」

「……私は、篠ノ之束の妹ですから」
「篠ノ之って――ええ！？」
「ですので、結構です」
「そ、そう。それなら仕方ないわね」
ああ、行ってしまった。
「今日の放課後」
「ん？」
「剣道場に来い。一度腕がなまってないか見てやる」
「いや俺はＩＳのことを――」
「見てやる」
「……わかったよ」
「ついでに、日比谷も来い」
「へ？　俺も？」
「来い」
「……わかりました」

やれやれ。でも、俺、剣道なんてやったことねえぞ。痛そうだし。

と思ったら審判の役でした。え？　カナシクナイヨ。

入学二日目（後書き）

次回！やっとクラス代表戦開始です！

８／１０修正

クラス代表決定戦！　ＶＳセシリア・オルコット（前書き）

あぶねえ！！
ぎりぎりだった。
それではどうぞ。

クラス代表決定戦！　ＶＳセシリア・オルコット

月曜日、俺はオルコットが吹っ掛けてきた決闘の決着をつけるためにアリーナに居た。

「あれがオルコットのＩＳか」

黒鉄のハイパーセンサーがオルコットのＩＳのデータを映し出す。

――戦闘待機状態のＩＳを感知。操縦者セシリア・オルコット。ＩＳネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊武装あり――

射撃型か。それ自体は問題はないが、ビット型兵器が面倒だな。アレが使えれば楽なんだが……

「裕貴、勝てるのか？　あんなこと言っちまって」

「大丈夫だ、問題ない。俺をなめるなよ？　伊達に１０００時間もＩＳに乗ってねえよ」

「裕貴１０００時間も乗ってたのか！？」

「ああ、中一の頃からほぼ毎日。しかも黒鉄に乗り慣れるのに一年かかったんだぞ」

そう、俺は最初黒鉄を全くといっていいほど操縦できなかった。操作を少しでもミスすると途端に墜落する。それに慣れるのに一年かかったって訳だ。

「あ、そうだ。織斑先生」

「ん？　どうした」

「この学園ってＥＭＰ対策は万全ですか？」

「ああ。高高度核爆発でのＥＭＰ攻撃を想定して、全ての電子機器に対策が施されている」

「さすがＩＳ学園ですね、それぐらいは対策済みですか。ですが――」

俺はアリーナに設置されたモニターを睨む。そこにはブルー・ティアーズを駆るオルコットが移っていた。

「あら、逃げずに来ましたのね」

「逃げる意味がないからな」

「ふん、では最後のチャンスをあげますわ」

「チャンス？」

「あなたのボロボロで惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというなら、許してあげないこともなくってよ」

――警告、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティの

ロック解除を確認――

「そういうのを自信過剰って言うんだよ」

「あら、そうですか。残念ですわね。それなら――」

――警告！　敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填――

「お別れですわね！」

キュインッ！　耳をつんざくような音が響く。刹那、青色の一筋の閃光が俺を撃ち抜こうとする。

俺は左腕の実体シールドでその閃光を打ち消す。

「っ！？」

「焦るなよ。試合（ゲーム）はまだ始まったばかりだぜ？」

某王様風に。そして俺は背に格納された二門のガトリング砲『黒影（こくえい）』を展開、無数の弾丸がオルコットを襲う。

「っ！？」

さすがは代表候補生、被弾しながらも確実に回避している。だけど、このガトリング、両手が空くんだよね。固定されてるから頭でイメージすれば好きな方向に動かすことが出来る。イメージ・インターフェースって奴だ。

俺はグレネードランチャー『黒炎（こくえん）』を展開（オープン）し放つ。そのとき、

「くっ……、行きなさい！　ブルー・ティアーズ！」

オルコットの背に搭載されていた四枚のフィン・アーマーが分離しこちらへ向かってくる。

「待ってたぜ、この時を！」

俺は黒炎を収納（クローズ）し、新たに携行型ミサイルランチャー『黒槍（こくそう）』を展開。黒槍は様々な種類のミサイルを装填することができる。そして今回は……

「学園に被害が出たらすみません！　ＥＭＰミサイル！」

黒槍から一つのミサイルが射出され、時間差で爆発する。

ＥＭＰミサイルとは、電磁パルスを発生させるミサイルで、様々な電子機器を破壊もしくは誤作動を起こさせる。

ＩＳには効果がないが、それ以外の装備されている電子機器には効果的なダメージを与えられる。今回はビット型兵器がそれにあたるな。

「なっ！　ブルー・ティアーズが！？」

四機のビットが煙を上げて墜ちていく。ほら効果的。

「残念だったな。そのビットが切り札だったようだが、これからはＥＭＰ対策も万全にするんだな」

「く……っ！」

キッっと俺を睨むオルコット。その目には悔しさが滲み出ていた。

――残りミサイル１６０発、装填準備完了しました――

「じゃあ、そろそろ終幕（フィナーレ）といこうか！」

四機のミサイルポッドの砲門が一斉に開く。

「させませんわ！」

オルコットはここぞとばかりにライフルを連射する。だが俺は四機のミサイルポッドの制御に意識を集中しているため守る術がない。

「ぐ……っ！」

ライフルのビームが俺を襲う。それは確実に俺を狙いシールドエネルギーを削っていく。

――警告、シールドエネルギー残量低下、残り１３――

「あなた……なぜ避けなかったんですの？」

「ああ？　そんなもん俺が動かないって言ったからに決まってるだろ。俺はな決めたことは必ずやり遂げる、たとえこの体が傷ついてもな。それが、俺の大切なものだったらなおさらだ」

「っ！！　そう……ですか。ならこれで終わりですわ」

オルコットが最大出力のライフルを構えた瞬間。

「いや、俺の勝ちだ」

四機のミサイルポッドが一斉に火を噴く。しかも、ミサイルを射出した瞬間、即座に再装填（リロード）し射出。これが残りミサイルが無くなるまで繰り返される。そう、これが第三世代技術“フルオート・バースト”だ。まあ、普通は全弾発射なんてしないから、今回は６４発だ。

「くぅ……」

オルコットはミサイルを回避しようと横方向に回避行動をとる。まだ諦めないか。大抵の奴はこれで戦意喪失するんだけどな。

だがオルコットの回避空しく、凄まじい音と共に爆発に巻き込まれる。

『試合終了。勝者――日比谷裕貴』

そう審判の判定が下った瞬間、オルコットのＩＳが光の粒子となって消滅していく。

「やべっ！」

飛行能力を失ったオルコットはそのまま重力に従い落ちていく。俺は無意識のうちに瞬時加速（イグニッション・ブースト）をして、オルコットをキャッチする。

「あっぶねー。おい、大丈夫か……って、気絶してるし」

俺はオルコットを抱えたままピットへ戻った。

「おい、ひろ……き」

俺を待っていてくれた一夏が口ごもる。なぜ？　ちなみに今の俺はオルコットを、いわゆるお姫様抱っこしている状態だ。なにか変か？

「織斑先生。俺はこのままオルコットを保健室まで運んできます」

「ああ。帰ってきたら、次は織斑との試合だ。気を抜くなよ」

「分かってますよ」

俺は今保健室に行く途中だ。ＩＳを展開したままで、オルコットを抱えている。

「ん……」

「お、気がついたか？」

「へ？」

「ん？」

意識を取り戻したオルコットは周りを見渡して、最後に俺の顔を見るなり――

「きゃああっ！！」

「おわっ！」

突然叫び声を上げて暴れ始めた。

「ば、馬鹿！　落ちるぞ！」

「な、なぜ日比谷さんが！？　な、なぜわたくしを！？」

「と、とりあえず落ち着け！　お前さっきまで気絶してたんだぞ！」

「あ……っ」

「まったく。俺が保健室まで運んでってやるから、それまで大人しくしてろ」

「は、はい……」

ん？　顔が赤いな、どうしたんだ？

「おい、顔赤いぞ。どうしたんだ？」

「い、いえっ、何でもありませんわ！」

「？　そうか。ならいいんだ」

なんなんだ？　さっきまで暴れてたのに今度は急に静かになるし。まあ静かなほうが運びやすいからいいんだけどな。

「うぅ……」

さっきまで暴れていたセシリアは急に顔を赤らめて大人しくなっていた。

「（な、なんですの？　この人は？　わたくしの知らない間に、だ、抱きかかえるだなんて……）」

もちろんそれが日比谷の気遣いだということは分かっていたが思わずにはいられなかった。

「（で、でも……それほど嫌でもありませんわね……）」

もう一度、セシリアは自分をお姫様抱っこしている日比谷の顔を見る。

その瞳は今まで自分が見てきた情けない男の物ではなかった。強く、たくましく、その身を削ってでも目的を達成しようとする。そんな瞳だった。

「（さっきの試合――）」

宣言どおり、彼は一歩も動かなかった。最後なんて避けようと思えば避けれたはず、なのに動かなかった。

そして負けた。圧倒的な敗北だった。

「（彼は強いですわね）」

強い。

もちろん力の意味での強さもある。

だが、それとは違う。心の強さを感じた。

「（日比谷裕貴――）」

すると彼と目が合った。セシリアは恥ずかしくて目を逸らしてしまったが、ある一つの思いがこみ上げてきた。

「（彼のことをもっと知りたい）」

それはセシリアが生まれて初めて体験した感覚だった。

「ふう、やっと着いたな」

目の前には保健室の扉。生憎、引き戸だったのでオルコットに空けてもらった。そういえばオルコットの奴、急に黙り込んじまって全然喋らなかったな。具合でも悪いのか？

「失礼しまーす」

残念ながら中には誰もいなかった。先生とかいないのかよ、不親切だなぁ。

俺は近くのベッドにオルコットを寝かすと、次の試合があるので保健室を出ようとする。

「じゃあな、オルコット。俺は次、一夏と試合しなないといけないから行くわ。ああ後、先生も呼んどくからな」

保健室を出ようとした瞬間、オルコットに呼び止められた。

「あ、あのオルコットではなく“セシリア”と呼んで頂けないでしょうか？」

「？　ああいいぜ。セシリア」

「ありがとうございます。　裕貴さん」

「おう。じゃあな」

そう言って保健室を後にする。

さあ次は一夏か。どんなＩＳが出てくるのかね。楽しみだ。

クラス代表決定戦！　ＶＳセシリア・オルコット（後書き）

セシリアがデレました。
はい、早いっすね。
基本的にセシリアヒロインで行くのでよろしくです。

主人公設定　日比谷裕貴（前書き）

オリ主、日比谷裕貴と専用ＩＳ黒鉄の設定です。

主人公設定　日比谷裕貴

日比谷裕貴（ひびやひろき）

髪：少し茶髪の混じった黒髪で服の襟に少しかかる位の長さ

趣味：特にないと言っているが、中学時代はＩＳに乗ることが趣味のようなものだった

身長：１７６ｃｍ

体重：６２ｋｇ

得意技：お姫様抱っこ

ＩＳランク：Ａ＋２

自転車に乗っていたところをトラックに撥ねられ即死。その後、神様に転生させてもらった転生者。

努力家で一度決めたことは最後まで貫き通す精神を持っている。
女尊男卑を心底嫌っている。「男のくせに～」「男はこれだから～」など差別的な言葉を聞くと黙ってはおれず、冷静ながら　もキレる。同じように女＝偉いと思っている人間は徹底的に叩き潰そうとする。
一級フラグ建築士の素質を持っており、クラス代表でコテンパンに叩きのめしたセシリアを一瞬で惚れさせた。しかし極度の　鈍感で、一夏にも引けをとらない。
影が薄く、しょっちゅう忘れられる。中学のとき、真横にいたのに自分の陰口を言われたことがあるほど。

専用ＩＳ　『黒鉄（くろがね）』

裕貴の両親が起業したＩＳ専門企業『ＴＦＩＣ社』の第三世代型ＩＳ。
機体カラーは黒を基調に所々赤のラインが入っている。待機形態は左腕に着けた黒色のバングル。
打鉄の派生機で、超攻撃特化型。扱いにくく、裕貴でさえ慣れるのに一年を要した。
重武装なので重く、速度が遅いという欠点があったが、高出力スラスターを四枚取り付けることでそれを補った。
装甲の至る所に武器が格納されていて、その数およそ十にもなる。
まさに「殺られる前に殺れ」の思想を体現した機体であり、防御手段は左腕の実体シールドだけである。
原作で打鉄弐式というＩＳがあるが、あれはあくまで打鉄の後継機であり、こちらは派生機である。

武装

『黒影（こくえい）』

黒鉄の背中に格納されている、二門のガトリング砲。連射速度がかなり速く、片方だけで毎分１８０００発、秒に直すと毎秒３００発　とそこらの機関銃では太刀打ちできない速度である。固定されており、両手を使わなくても、イメージすれば思ったとおりに　動く。

『黒雷（こくらい）』

八門×四機の多弾頭ミサイルポッド。最大弾数はステルスミサイル３２０発、それぞれのポッドに８０発分装填できる。ミサイルに高性能赤外線画像認識自立誘導システムが搭載されているため命中率が高く、フレア等の欺瞞も効かない。第三世代技術　フルオート・バーストで断続的にミサイルを撃ち続けることが出来る。しかし、発射準備に時間がかかり一発でもミサイルを　発射すると準備時間がリセットされる。

『黒炎（こくえん）』

汎用型４０ｍｍグレネードランチャー。状況によって使用弾種を使い分けることが出来る。
対応弾種：グレネード弾・徹甲榴弾・閃光弾の三種類

『黒槍（こくそう）』

携行型ミサイルランチャー。様々な種類のミサイルを装填することができる。今は普通のミサイルとＥＭＰミサイルのみ。

主人公設定　日比谷裕貴（後書き）

えー、突然ですが、これから黒鉄の武器『黒槍』のミサイルの種類のアイディアを募集します。期間は無期限。でも突然締め切るかもしれないですけど。

詳しくは活動報告にて。案もそこの感想でお願いします。

クラス代表決定戦！　ＶＳ織斑一夏

「やっと来たか」

俺は一夏との試合をすべく、アリーナに居た。

「ああすまん、専用機が来るのが遅れてな」

一夏は眩しいほどの純白のＩＳ『白式』を纏っていた。

「悪いが手加減はなしだからな」

「当然。全力で来い」

「そうか。それじゃあ……やらせてもらうぜ！！」

そういった瞬間、俺は黒影を展開し一夏に放つ。無数の弾丸が黒い影となって一夏に襲い掛かる。

一夏はなんとか回避しているものの着実にシールドエネルギーを奪っていく。

俺は黒炎を展開（オープン）、弾種は徹甲榴弾。それを一夏に向かって撃ち出す。

「うおっ！？」

撃ち出された徹甲榴弾は一夏の右肩に突き刺さる。一夏の右肩は弾の慣性を殺しきれず大きく仰け反る。そして突き刺さった弾は突然爆発を起こしアーマーを破壊する。

「ぐはあっ！！」

一夏は爆発によって吹き飛ばされ地面に接触する前に体勢を立て直す。

そして俺は黒炎を収納（クローズ）し、黒槍を展開する。

「これで最後だ！」

ランチャーを肩に担ぎ、一夏をロックオン。トリガーを引き、ミサイルを射出する。今回はただのミサイルだから普通に追尾していく。

「うおおおっ！！」

ギィンッ！　金属が切り裂かれる音が聞こえた数秒後、ミサイルは一夏の遥か後方で爆散した。

「！　やるじゃないか、一夏」

黒雷のミサイルを四発発射する。このミサイルはステルスだからハイパーセンサーに捉えることは出来ない。すなわち、目視でミサイルを確認するしかないのだ。

ギィィンッ！　またしても一夏はブレードを横に一閃させ二つのミサイルを真っ二つに斬る。その勢いで遅れて飛んできた残りの二つも撃墜する。

「このミサイルに追われて無事、しかも撃墜するなんてお前が初めてだぞ」

「そりゃ嬉しいな。なら、もう一つ初めてを増やしてやるさ！」
さっきまでの不安定な動きが消え、今は確実に攻撃を避ける動きになっている。
こんな相手は久しぶりだ。俺を楽しませてくれる、一夏という男は！

◇

「はぁぁ……。織斑君も日比谷くんもすごいですねぇ」
ピットのモニターを見ていた山田真耶がそう呟く。
これまで代表候補生であるセシリアをその場を動かずして圧倒した裕貴も凄いが、一夏もこれがＩＳ起動二回目とは思えないほどの機敏な動きをしていた。
しかしそれを見て逆に忌々しげな表情をしていたのは、千冬だった。
「あの馬鹿者。浮かれているな」
「えっ？　どうして分かるんですか？」
「さっきから左手を開いたり閉じたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」
「へぇぇぇ……さすがご姉弟（きょうだい）ですねー。そんな細かいことまで分か

るなんて」

そう感心した真耶に、千冬はハッとする。

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな」

「あー、照れてるんですかー？　照れてるんですねー？」

「……」

ギリリリッ。真耶の頭にヘッドロックが炸裂する。

「いたたたたたっ！」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「わ、分かりましたから離してください！　……ふぅ、凄く痛かったです。それにしても日比谷くん、強いですね。あれなら代表候補生にもなれるんじゃないですか？」

「そうだな。日比谷の実力ならそこらの候補生には負けないだろう。おそらく一年生最強クラスだ」

そんな会話をしていると戦況は大きく動いた。

◇

――獲った！
ミサイルを掻い潜り、日比谷の間合いに入った俺は、完全に勝ったと思っていた。俺の得意な間合いに入ってしまえばこっちのもの。俺は加速し、日比谷に接近した。そしてブレードを振り下ろそうとしたとき。

「なんだ一夏。俺が近接戦闘を出来ないと思っているのか？」

日比谷がそう言うと、両腕の装甲が開き、ショートブレードが展開された。日比谷はそれでブレードを受け止め、俺の腹に蹴りを入れてくる。俺は重い衝撃と共に横へ吹き飛んだ。そのとき日比谷はグレーネードランチャーを発射したが――

なんで俺の目の前なんだ？　明らかに俺に当てることを狙っていない。そのほかの何かに狙いが――まさか！

その意図にやっと気付いたが時すでに遅し。その弾丸は強烈な閃光と爆音を放ち、俺の自由を奪った。
朦朧とする意識の中、俺が微かに見たのは、迫り来る六つのミサイルだった。

◇

「一夏っ……！」

モニターを見つめていた箒は、思わず声を上げた。
さっきまで話し込んでいた千冬と真耶も、爆発で黒く染まったモニターを真剣な面持ちで見つめる。

「――ふん」

黒煙が晴れた途端、千冬は鼻を鳴らす。その顔には安堵の表情も浮かべていた。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

まだ微かに残っている煙の中に、白い影が浮かび上がる。

――真の姿で

◇

「まだ残っていたか」

煙が晴れるとあの純白の機体が姿を現した。
するとその純白のＩＳは光の粒子となって弾け、再び形を形成していく。

「これは……」

その新たな装甲は、さっきまでの実体ダメージが消え、より洗練

されたアーマーに進化していた。

「一次移行（ファースト・シフト）。お前、今まで初期設定だけで戦っていたのか」

「ああ、どうやらそうらしい」

一夏は新たな武器を展開する。現れたのは日本刀のような反りのある刀。それは次の瞬間変形し、刀身だった部分には光の刃が形成された。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

「なに？」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

そうか。お前も新たな目的を見つけたか。なら――

「なら俺は……全力でお前を迎え撃つ！」

黒雷を構え、全弾を射出する。フルオート・バーストほどではないが、それでも３２発のミサイルが一夏に降り注ぐ。

「見える……！」

一夏は自分からミサイルに突っ込んで行き、進行に邪魔なミサイルだけを切り落とし、加速して他のミサイルを置き去りにする。

「おおおおっ！」

「なっ……！」

刃が振り下ろされる。俺は反射的に片方のガトリング砲を上げ、横に構える。

ガギンッ！

光の刃がいとも簡単に六本の砲身を両断する。そして一夏はさらに下段から上段への逆袈裟払いを放ってきた。

しかしその斬撃が装甲を切り裂くことはなかった。

「え……？」

緊急のスラスター逆噴射。それにより俺は後方へ回避、一夏は猛烈な爆風に体勢を崩す。

そして――

『試合終了。勝者――日比谷裕貴』

「は？」

その終わりは余りにもあっけないものだった。

クラス代表決定戦！　ＶＳ織斑一夏（後書き）

たくさんのミサイル案ありがとうございます！
これからも続けていきますんで、思いついたら活動報告にて書き込んでください。

感想待ってます。

実践授業

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、日比谷、オルコット。試しに飛んでみせろ」

四月下旬。桜の季節も終わり、もうほとんどがその花びらを散らせている。

今はＩＳの実践授業だ。まあ俺は乗りなれてるからどうってことはないんだが。

「分かりました」

「分かりましたわ」

俺とセシリアはすぐにＩＳを展開する。俺は左腕のバングルに意識を集中させる。一瞬、光が俺を包み込み、次の瞬間には黒鉄を展開し終えていた。その間０．２秒。おっ、０．１秒縮まった。

見るとセシリアもＩＳを展開し終えていたが、一夏はまだ展開できていない。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

そうせかされて、やっと一夏も展開し終えた。

「よし、飛べ」

その瞬間、俺とセシリアは急上昇した。セシリアが先に上空で停止し、俺も遅れて停止する。いくら高出力スラスターを四枚つけていても重さでスピードが出ない。

遅れて一夏も上がってくるが、俺よりもかなり遅かった。
「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」
織斑先生のお叱りを受けながら、一夏も俺たちと同じところに辿り着いた。
「うーん、なんかイマイチ感覚が掴めないな」
「一夏、イメージは所詮イメージだ。自分のやりやすい方法を探せばいいさ」
「そう言われてもなぁ。大体空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ？」
「説明してもいいが、長いぞ？　反重力力翼と――」
「――流動波干渉の話になりますもの」
俺とセシリアが息ぴったりの回答をする。おお。なんたる偶然。
「分かった。説明はしてくれなくていい」
まあ多分、一夏じゃ理解できないかもな。あれ？　俺って酷い？
「まあなんだ、放課後特訓のときにでも教えてやるよ」
「おっ、助かる」
放課後特訓とは俺と一夏が、放課後にしているＩＳの特訓のこと

だ。これまで箒も一緒にしていたのだが、この前新たにセシリアもこの特訓に加わった。この前のクラス代表決定戦の後からセシリア何かと理由をつけて一緒に特訓したがるんだよな。なんでかね？

「一夏っ！　いつまでそんなところにいる！　早く降りて来い！」

通信回線から篠ノ之の怒鳴り声が聞こえる。ああ、山田先生のインカムを奪ったのか。おろおろしてるよ山田先生。

「織斑、日比谷、オルコット、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

「分かりました。じゃあな一夏。お先」

俺とオルコットは地上に向かって加速する。どんどん近づいてくる地面を見ながら、すんでのところで停止する。

「日比谷は四センチ、さすがだな。オルコットは十センチちょうどか、まあ合格だな」

ギュンッ――――――――――ズドォォン！！！

「あの、馬鹿……」

確かに一夏は地上に着いた。

墜落という形で。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろといった。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

脳内リプレイ――

『ぐっ、とする感じだ』

『どんっ、という感覚だ』

『ずかーん、という具合だ』

――……。

擬音じゃねーか！

「織斑、武装を展開しろ。それぐらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はい」

すると一夏の手の平から光が放出され、武器を形作っていく。光の放出がおさまるとそこには、『雪片弐型』が握られていた。

「遅い。０．５秒で出せるようになれ」

うお、手厳しいね。

「では、日比谷、オルコット、武装を展開しろ」

「「はい」」

おおう、ハモった。どうでもいいけど。俺は黒炎を左手、黒槍を右手に展開する。０．２秒か、ＩＳの展開時間と同じだな。

横を見るとセシリアも展開を完了していた。

「二人ともさすがだな。――ただし、そのポーズはやめろオルコット。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ。いいな」

「――、……はい」

有無を言わせぬ織斑先生の指導、いや命令と言った方がいいな。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

ああ、あの穴を埋めておけってことだな。ん？　一夏がこっちを見ている。

手伝え？

俺はプライベート・チャネルで一夏に話す。

『頑張れ、一夏！』

そして俺は走り出す。一夏が帰ってきたのは、昼休みが終わる頃

だった。

忍び寄る影

「というわけでっ！　日比谷くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと～！」

ぱーんと、クラッカーの音と共に紙テープが宙を舞う。それは俺と一夏の頭にふわりと乗った。

「どうもどうも」

場所は寮の食堂。並べてくっつけたテーブルを俺と一夏を中心に女子が囲んで座っている。そして俺の頭上には『日比谷裕貴クラス代表就任パーティー』と書いてある紙がでかでかとかけてある。

「いやー、これでクラス代表戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

さっきから相づちを打っているのはなぜか二組の女子。なんでいるんだよ。これ一組の集まりだぞ。別にいいけど。

「人気者ですわね、裕貴さん」

「そうか？　まあ俺が出てクラスが優勝できるんならいいけどな」

「そうですわね」

あれ？　なんかセシリアの機嫌が悪いぞ。パーティーなんだからもっと楽しくしようぜ？

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、日比谷裕貴君と織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました～！」

周りの女子がオォ～と感嘆の声を上げる。ただのインタビューだろ？　そこまで盛り上がらんでも。

「あ、私は二年の黛薫子（まゆずみかおるこ）。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

名刺を受け取り、見てみる。この名前かっこいいな。なんか漢字の形とか、雰囲気とか。

「ではではずばり日比谷くん！　クラス代表になった感想を、どうぞ！」

黛先輩は手に持ったボイスレコーダーをずいっと俺に向け、その目を輝かせている。

「そうですね……ふぅん、貴様と俺では天と地ほど力の差があることを教えてやる……とかどうです？」

「おお！　いいねそれ！　明日の一面はこれで決まりね！」

え？　マジですか？　ふざけて某社長風に言っただけなのに？

それでいいのか。

「じゃあ次織斑君！　この学園に入った感想は？」

「えー……。まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ～。俺に触るとヤケドするぜ、とか」

なんだろう。ここにツッコメない自分が居るよ。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

いやいや、それを言うなら……やっぱいいです。

「じゃあまあ、適当にねつ造しておくからいいとして」

いいのかそれで。まあ副部長が言ってるんだからいいんだろう。

「じゃあ、とりあえず三人並んで。写真撮るから」

「えっ？」

セシリアが意外そうな声を上げる。その中に喜びの感情も混じっている気がする。

「注目の専用機持ちだからねー。あっ織斑君後ろで前の二人の間に。そうそう。じゃあ三人で握手しようか」

「そ、そうですか……。そう、ですわね」
なぜかセシリアが落ち着かない様子でモジモジし始めた。なんだ？　トイレでも行きたいのか？
「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」
「そりゃもちろん」
「でしたら今すぐ着替えて――」
「時間かかるからダメ。はい、撮るよー」
俺とセシリアが握手して、その上に一夏が手を乗せる感じだ。
「……」
ん？　セシリア顔赤いな。風邪か？
「セシリア、どうした？　顔赤いぞ」
「へ？　はっ！　な、何でもありませんわ！」
「？　そうか」
「それじゃあ撮るよー。１５９６４２×２４８÷２は～？」
「は？　え、えーと……５０？」

「あたしもわかんなーい」

なんだそれ。大体三桁超えたら計算できねえだろ。――ん？

「なんでみんな入ってるんだ？」

見ると、一組のほぼ全員が一箇所により固まっていた。ていうか、いつの間に？　女子の行動力に感心した一瞬だった。

俺はその後、家に帰るため早めに抜けさせてもらうことにした。一人は危ないとセシリアに言われたが、俺にはＩＳがあるからな、大丈夫と言って出てきた。

◇

暗い夜の道。今俺は家に帰るため暗い人気のない路地を歩いていた。路地といってもある程度は広く、車なら五台くらい余裕で通れそうだ。

「はあ、面倒なことになったなぁ。クラス代表誰か変わってくれよ」

そんなことを物々言いながらも俺はいつもと違う異様な気配を感じていた。

「で、そこのお前いつまでついてくる気だ？」
すると曲がり角から一人の女性が出てきた。
「ちっ、気付かれてたか。まあいい。さあ、さっさとＩＳを寄越しなクソガキ！」
「はあ？　何言ってんだ。渡すわけねえだろ」
「だったら力ずくで奪い取ってやらぁ！！」
すると謎の女の着ていたスーツが破れ、背中から爪が飛び出してきた。蜘蛛の足にも似たその爪は先端が鋭利な刃物になっている。女はその八つの装甲脚を武器に俺に向かってきた。
「問答無用ってわけね。なら――」
俺は即座に黒鉄を展開。そして両腕の装甲を開きショートブレード『黒刀』を展開し、装甲脚を受け流す。
そして腹に蹴りを加え吹っ飛んだところに、お馴染み黒影を展開。毎秒３００発×２の弾丸が女を襲う――筈だった。
バシュウッ！
「なっ……！　ぐぅ……」
突然、後方から赤い閃光が俺の左腕を貫く。バカな！　ＩＳが二機だと！？
上空１００ｍのところにセシリアのブルー・ティアーズよりも色の濃い、青色の機体があった。あれは……イギリスの第三世代機！

強奪されたと言っていたが、こんなところに……

「来んのが遅えんだよ！！」

すると謎の女は手から蜘蛛の糸のようなものを飛ばしてきた。後ろのＩＳに気を取られていた俺は数秒でがんじがらめにされてしまった。

「ＩＳを渡してもらうぜ？」

女は大きさ４０ｃｍほどの、四本足の装置を持っていた。それは稼動音を響かせると足が開いた。

女が近づいてくる。だが、俺をなめてもらっちゃ困る。

俺の膝の装甲を開き、そこから小型のミサイルを発射する。女は咄嗟に後方に飛び回避するが、ミサイルはそんなことは気にせず直進地面に当たって爆発した。

「へっ！　焦らせやがって。ガキが！」

「なに勘違いしてんだ？」

「なんだと！？」

「お前のその自慢の武器、壊れてるぜ？」

「なっ！」

その四本足の武器は内部から煙を上げている。そうさっきのミサイルはＥＭＰだったんだ。効果範囲は２０ｍ位だから周辺の家には届いていない。

俺は装甲のあちこちから小型の刃を展開、蜘蛛の糸を切り裂き体の自由を取り戻す。
だが状況は不利だ。こっちは一人、あっちは二人。しかもさっきやられた左腕の感覚がない。
左腕からは止まることなく血が溢れている。ＩＳの止血機能が働いているが、血が足りない。意識が朦朧とする。

「なら、これでも食らえ！」

俺は黒槍を展開し片手でミサイルを射出する。そのミサイルは少し進むと閃光と爆音を放った。

「くっ……閃光弾か！？」

敵二人が隙を見せたところで、俺は飛翔。ＩＳ学園に向かって飛び去った。置き土産を残して。

ドゴオオオンッ！！！

数秒後、１００ｍ上空で大爆発が起きた。
そう俺の置き土産は最強の爆薬『オクタニトロキュバン』を使用した、その名も『ＯＣ（ＯｃｔａｎｉｔｒｏＣｕｂａｎｅ）ミサイル』。左腕の仕返しだ。

（こりゃ、クラス代表なんてやってられねえな）

そして黒鉄は闇に紛れて姿を消した。

忍び寄る影（後書き）

ミサイル案募集しといて、自分のを使う作者
サイテー！
すみません、皆さんのもきちんと使いますんで（ペコペコ
出来る範囲で、ですけど

感想待ってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6665u/

IS<インフィニット・ストラトス>　～変わっていく物語～

2011年10月9日10時26分発行